

そこで、私たちはまず、砲座跡を見ることにした。

住職夫人の許しを得て、本堂の裏に回ってみると、保存管理の行き届いた砲座が口を開いていた。コンクリートで固めた一メートルぐらいの穴だった。もちろん奥は塞がれている。

道路側にある駐車場裏の崖にも砲座の跡らしいものが残っていた。

つぎに私たちは、小学校の校庭に上がってみた。

目の下には商店街があり、その先に広々とした太平洋が一望された。

砲座が間違いなく海にむかつて口を開いていることがよく分かった。

私と井上さんは略図にもとずいて、校庭上から「鉄壁坑道」が在ったあたりの見当をつけて距離を計ってみた。百メートルを少し越えるぐらいの長さがあった。「義経坑道」もそのくらい長さがあったのであろうと推測される。

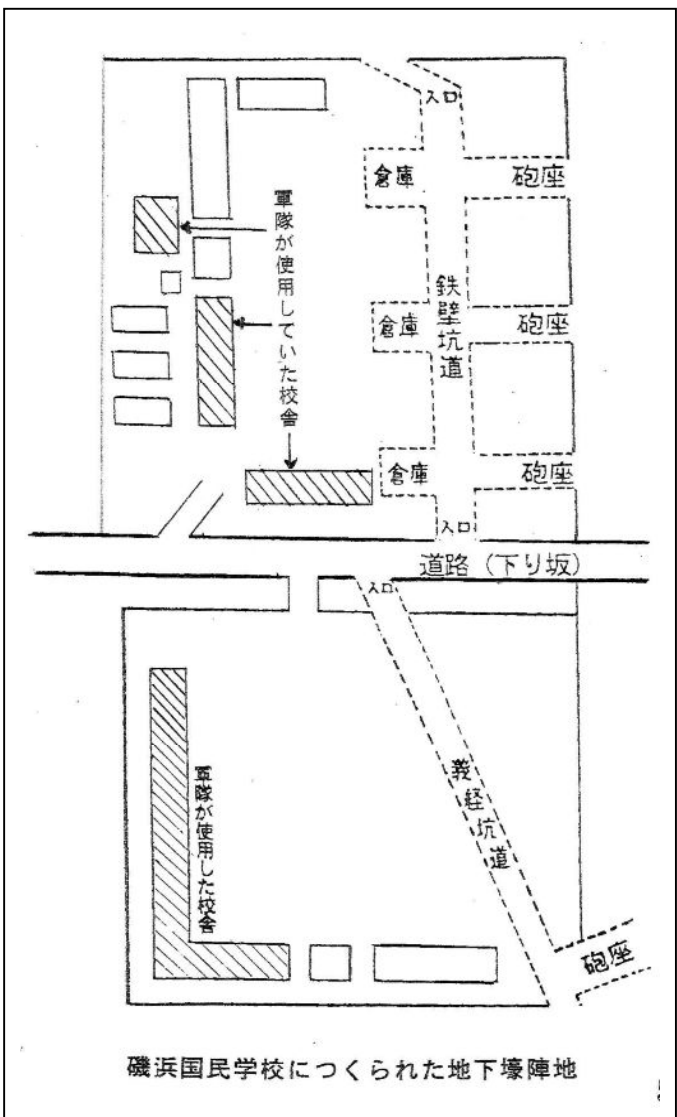
二つの坑道は、道路を挟んで向かい合って入り口がある。そこをから互いに往来していたようである。

記録によると、地上の校舎の大部分も軍の兵舎として使われていたのであるから、当時はもうここは学校ではなく、地上も地下も軍の陣地だったといえるのではないだろうか。

― 平時は校舎を兵舎にして軍務につき。空爆や艦砲の危険が迫れば地下壕陣地にもぐり込む。上陸軍が接近してきたならば、砲座から攻撃を加える。そういう陣地として構築されたものではないだろうかと思つた。

と、しても、上陸前の米軍の空爆と艦砲の嵐に、はたして耐えられたであろうかとも思つた。

私たちは、地下壕の中が、どんなだったのかを知りたくて、



(壕の中に入って見た人はいないだろうか)

近所の方や、その当時町役場にいた人など、何軒かの宅を訪問して尋ねてみたが、

「軍の機密だったし、終戦と同時に塞がれてしまったからな、壕の中に入ったことも見たこともありませんよ」

どこでもそういう言葉しか返って来なかった。

地下壕陣地の中を知りたいという期待は、徒労に終わってしまったのだが、しかし、最後に訪ねていった人からは、そのことよりも、もっと貴重な体験を聞くことができたのだった

関東軍の精鋭連隊か鹿島に

大洗で、私たちが最後に訪ねた方は、

「私は本土決戦軍に所属して茨城にいたが、大洗の地下壕陣地に関係はない」と、前置きして、つぎのような話を聞かせてくれた。

私は関東軍の野戦重砲連隊に所属していたんです。連隊はソ満国境「シベリヤと中国東北部との国境」でソ連軍と対峙していました。その私たちの連隊に、昭和二〇年（終戦の年）の二月に本土決戦への転戦命令が下ったのです。連隊は朝鮮に近い港で輸送船に乗りました。馬までは積む余裕がないので馬は置いてきました。

もうその頃は米潜水艦の攻撃が脅威になっていましたので、それを避けながら、朝鮮の沿岸を何日もかかって航行し、新潟港に上陸しました。そこからは国鉄の貨車に積んでの輸送です。

ソ満国境から持ってきた兵器は、十三センチ榴弾砲二四門、砲弾三〇〇発。砲弾だけでも貨車八〇輛という膨大なものです。

それを、国鉄の貨車に積んで、水郡線の瓜連駅まで運んできて駅前を集結したのですが、それからが大変でした。馬は向こうに置いてきてしまったので、そこからは人力で運ばなければならなかったのですから……。鹿島灘まで。

連隊はいくつかの部隊に分けて、鹿島灘沿岸に近い内陸部に布陣をしたんです。

私は、玉造の和歌海という所の山の中に設置した連隊（九二九野戦重砲連隊）本部にいたのですー

帰りぎわに、

「もし、米軍が鹿島灘に上陸していたら、いまごろこうしていられませんね」というと。

「まちがいでなく戦死していたでしょうね」という言葉が返ってきた。

私たちは、話しに引き込まれて、興奮してしまい、うかつにも、この方の名前や軍隊での階級を確かめなかった。

井上さんともう一度訪問しようと言ったのだが、そのままになってしまっている。

当時のことを書いた戦史をみると、関東軍が本土決戦に転戦してきたという記録はあるのだが、「どんな部隊が、どこに転戦して来たのか」という記述は見当たらないだけに、この当事者のリアルな話しは貴重だった。

私が、元陸軍の将校だった知り合いの方に、この話しをしたら、
「へえー、そんなことまでやったのか」と驚いて、

「野戦重砲連隊といえば関東軍の精鋭部隊だ。そういう部隊を本土決戦に振り向けてしまったのでは「鬼の関東軍」が「張りの虎」になってしまったようなものだ。だから、ソ連軍が満州に攻め込んできたときに、開拓民を置き去りにして、関東軍はまっ先に逃げてしまったのだな」と、憤慨していた。

@ 関東軍とは――満州（中国东北部）に駐屯した日本の陸軍部隊。日本の満州支配の中核的役割をになったが、昭和二十年八月ソ連参戦によって壊滅した。

「まぼろし」ではなかった戦車旅団

内原

終戦時の戦史をみると、内原に「戦車旅団」が配備されていたという記録があった。

（なんらかの史跡が残っていないだろうか）

「展示パネル」づくりにとつては魅力である。

手掛かりを求めて、私は内原に関係のある方たちにあたってみたのだが、その段階では、

「そんな話しは耳にはしたが実在したのかな？」

ほとんどが、そんな反応で、手掛かりを得ることはできなかった。

そうこうしているときに……

「稲田神社の周りに戦車壕が造られて、その跡がいまも残っているよ」

笠間の池田征一さんから、飛びつくような知らせが入ってきた。

稲田神社は、笠間市の稲田にあり、国道五〇号線から北へ少し入った所の――小さな山というか――高台の上にある。

稲田神社は、私の先輩友常甚三郎さん宅の目と鼻の先なので、私は、事前に戦車壕についての話しを聞こうと思って、神社に登る前に友常さん宅を訪れたが、あいにく友常さんは不在だった。

そこで、私は単身神社の山の中腹あたりをさがし回ってみた。

数箇所に戦車壕らしきものがあつた。山の斜面に戦車が入るぐらいの窪みが掘られているのだ。

（戦車壕に間違いはないな）

私はカメラに納めて、意気揚々と山の頂きに登っていった。

頂きの一段高いところに神社がある。手前の低いところがゲートボール場になっている。その片隅に地域の公民館があつた。

中でお年よりが二人でお茶を飲んでいた。

「こんな所に戦車壕が造られていたなんて、思いもありませんでしたよ」

と、声をかけると、

「戦車壕とは何のことだい。そんなものはここには無いぞ。おれはずっと稲田に住んでいるんだが、戦車なんか見たこともないし、戦車壕なんて聞いたこともないな」

お年よりの一人が怪訝な顔をした。

「おれは、本土防衛の納部隊で、終戦まで稲田の国民学校にいたんだがな、そんな話しは聞いたことないぞ」

と、もう一人のお年よりが。

地元のお年より二人に、口をそろえて戦車壕の存在を否定されたしまったのである。私はすくすくと山を下りた。

意気消沈して帰途についた私は、笠間市内で、友常先輩とばったり出会った。

私が稲田神社の戦車壕を調べてきた経緯を話すと、

「あれは戦車壕に間違いはないよ。だけど、もうあの頃は戦車なんか無かったと思うな」

元納部隊の将校だった友常先輩は笑った。

（戦車の無い「幻の戦車旅団」だとすれば、もうこれ以上追ってみたところで仕方がないな）

と、私は思うようになった

内原、友部の住民でつくっている「内原・友部の水と緑を守る会」という自然環境を守る会があつた。

この会は、毎年五月のゴールデンウィークに、総会をかねた楽しい「つどい」を催していた。

3. 独立戦車第2, 第3, 第7旅団の編制概要

独立戦車旅団司令部 (各旅団同一)

旅団長 (少将, 大佐) 以下71名, このほかに通信班 (班長大尉以下139名) を有す。

【主要装備】

九七式中戦車 3 (47耗戦車砲×3), 九五式軽戦車 2 (37耗戦車砲×2), 装甲兵車 2, 重用車 2, 自動貨車 2, 小銃42, 拳銃15, 九七式車載重機10, 車両無線機乙3, 同丙5。〔以下は通信班〕中戦車 3 (47耗戦車砲×3), 九五式軽戦車 3 (37耗戦車砲×3), 乗用車 1, 自動貨車 5, 小銃115, 拳銃14, 九七式車載重機 12, 電話機18, 小被覆線36巻, 車両無線機10。

戦車聯隊 (戦車第41聯隊以外の聯隊)

【主要装備】

九七式中戦車 25 (47耗戦車砲×25), 九五式軽戦車 12 (37耗戦車砲×12), 砲戦車 20 (75耗砲×20), 自走砲 6 (九〇式野砲×6), 装甲兵車 12, 乗用車 1, 自動貨車 10, 軽修理自動車 1組, 小銃855, 拳銃197, 重擲10, 軽機10, 九七式車載重機118, 火焰発射機 4, 車両無線機83, 電話機20, 小被覆線40巻。

聯隊本部

聯隊 (中, 少佐) 以下83名, 別に2名増加。中戦車 3, 軽戦車 1, 乗用車 1, 小銃42, 拳銃14, 車載重機10。

中戦車中隊 (2) 中隊長 (大尉) 以下114名, 中戦車10, 軽戦車 2, 小銃78, 拳銃26, 車載重機36。
砲戦車中隊 (2) 中隊長 (大尉) 以下119名。砲戦車10, 軽戦車 2, 小銃80, 拳銃29, 車載重機14。(1コ中隊は20年8月に編成と規定)

自走砲中隊 (1) 中隊長 (大尉) 以下152名。自走砲 6, 装甲兵車 4, 小銃116, 拳銃27。
作業中隊 (1) 中隊長 (少佐, 大尉) 以下368名。軽戦車 1, 装甲兵車 8, 小銃292, 拳銃32, 重擲10, 軽機10, 車載重機 2。

整備中隊 (1) 中隊長 (少佐, 大尉) 以下129名, 中戦車 2, 軽戦車 1, 自動貨車10, 軽修理自動車 1組, 小銃89, 拳銃14, 車載重機 6。

午前中、男たちは近くの山掃除、女性たちは食べられる野草を採ってきて天麩羅やおしたしなどをつくる。その手料理で、昼食パーティで交流しながら総会を催す。という楽しい「つどい」なのである。

私は会員ではないが、誘われて何回か参加させてもらった。私が最後に参加した年(一九九五年)の「つどい」のときだったと思う。

男たちは、内原にある鯉淵学園近くの山林の掃除を終り、女性たちも山草・野草採りを終って、それぞれパーティ・総会の準備にかかっていた。

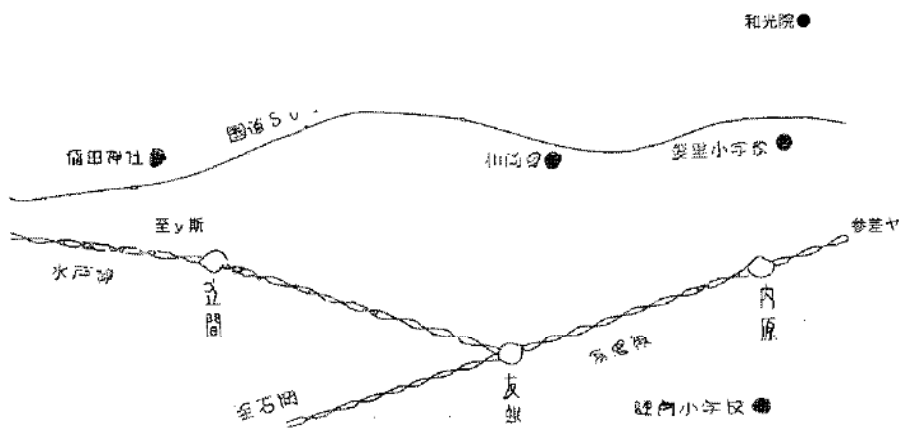
私は、友人の浅井紘一さんから地元の人たち三人と、焚き火の残り火で魚を焼きながら雑談を交わしていた。地元の二人はお年よりだった。

私は、戦車旅団のことを、まだ完全には諦めきいていなかったもので、ここが最後の駄目押しの機会だと思って、

「戦争末期に、内原に戦車旅団が配備されていたという記録があるので、私は調べてみたのだが、戦車は無かったようですね」と、きり出してみた。

すると、

「なにいつてんのよ、戦車はあったよ。終戦になったら二〇〇輛もの戦車が、



義勇軍訓練所の敷地——いま内原電機がある辺りだな——に集められた。子供だった俺たちは、そこが毎日の遊び場になっていたんだ」と、浅井さんが。

「あれは、進駐軍の命令で、武装解除のために集められたんだ」と、お年よりの一人が、

「おれが通っていた妻里小学校は戦車隊の兵舎になっていた。戦車が校庭に人ってきたとき、校門の御影石の門柱に引っ掛けて倒して折ってしまったことがあった。戦車を誘導していた兵隊が、俺たち子供が見ている前で、上官にこっぴどく殴られた。いまある門柱の片方は、その後建て替えたものなんだ。」

「鰐淵小学校や和光院も兵舎になっていたな」

「笠間の稲田神社には、いまも戦車壕の跡が残っているが、ほかにはなかったのかな」

「和尚塚にも戦車壕は造られていた。訓練もやっていたようだったな」

「戦車壕は米軍機の空襲から戦車を守るために造ったんだと思うよ……」

「戦争に使われないうまま武装解除になってよかったよな」

焚き火を囲んで、しばし、戦車旅団のことが話題となった。